

はじめに

エスターは6歳のとき、マザー・テレサのマンガを読みました。当時カルカッタと呼ばれていた都市はすごく混雑していて、人の暮らす場所が1人1平方メートルずつしかないのだと書かれていました。それを読んだエスターは、巨大な碁盤のような都市を思い浮かべました。それが縦横1メートルずつ区切られて、そのマス目に1人ずつ人間が、駒のようにしゃがみこんでいるのです。どうでしょう、と彼女は思いました。

やっと実際にカルカッタを訪れたのは24歳、マサチューセッツ工科大学(MIT)の大学院生になったときでした。街へ向かうタクシーから外を見た彼女は、ちょっとがっかりしたのです。どこを見ても空き地だらけ。木や草むらや、無人の歩道。マンガで赤裸々に描かれていた悲惨はどこにあるの？人はみんなどこへいつちやっただの？

6歳のアビジットは貧乏な人がどこに住んでいるか知っていました。カルカッタの自宅の裏にある、小さな掘っ立て小屋に住んでいるのです。その子たちはいつも遊ぶ時間がいっぱいあって、どんなス

ポーツでもアビジットより上手でした。その子たちとビー玉遊びをしたら、ビー玉はぜったいにそのおんぼろショーツのポケットに収まることになります。ずるいや、とアビジットは思ったものです。

貧乏な人々を紋切り型の束に還元しようという衝動は、貧困が存在するのと同じくらい昔からあります。貧乏な人は、文学は言うにおよばず社会学でも、ぐうたらだったり働き者だったり、高貴だったり泥棒だったり、怒っていたり無気力だったり、無力だったり自立していたりします。当然ながら、そうした貧乏人についての見方に対応した政策的な立場も、単純な図式におさまっています。「貧乏人に自由市場を」「人権を大幅に充実」「まずは紛争を解決すべき」「最貧者にもっとお金を」「外国援助が発展を潰す」等々。こうした発想はどれも、重要な真実を部分的に含んでいるのですが、希望と疑念、限界と野心、信念と混乱を抱いた実際の平均的な貧乏人にはほとんど出番がありません。貧乏人がたまたに登場するのは、何やらいいお話や悲惨な話の盛り立て役としてであって、感心されたり哀れまれたりはしても、知識の源泉にはならず、何を考えたりほしがったり行なったりしているかについて、まともに話を聞いてはもらえません。

貧乏な人の経済学は、貧困の経済学と混同されることがあまりに多いのです。貧乏な人はあまり物を持っていないから、その経済的な存在について興味深いことは何も無いと思われがちです。残念ながら、この誤解は世界の貧困に対する戦いをひどくダメなものにしてしまっています。単純な問題には単純な答えしか出てきません。反貧困の分野は、モノにならなかつた即席奇跡の死屍累々。先に進みたいなら、貧乏人をマンガの登場人物に還元する癖を捨てて、本当にその生活を、複雑さと豊かさのすべてにおいて理解するだけの手間暇をかけるところから始めなくては。過去15年にわたり、わたしたちはまさにそれ

をやるうとしてきました。

わたしたちは学者で、学者の多くと同様に、理論を構築してはデータとにらめっこをします。でもこの研究の性質のため、わたしたちはまた、何年にもわたりのべ何カ月も現場にでかけ、NGO（非政府組織）活動家や政府の官僚、ヘルスワーカーやマイクロ融資家たちといっしょに働いてきました。このために貧乏な人々が住む裏道や村に出かけ、質問をして、データを探します。本書は、そこで出会った人々の親切なくしては書けませんでした。ふらりと立ち寄っただけのことが多かったのに、しょっちゅうお客として歓待してもらえました。かなりピント外れな質問をしても、辛抱強くつきあってくれました。そして多くのお話を聞かせてもらえたのです。

オフィスに戻ったわたしたちは、そうしたお話を思い出しつつデータを分析し、魅了されつつも困惑して、見聞きしたことを単純なモデルに当てはめようと苦闘しました。プロの開発経済学者や政策立案者たちは（特に西洋人や西洋で訓練を受けた人だと）貧乏人の生活を考えるのに、伝統的にそうした単純なモデルに頼ってきたのです。得られた証拠を根拠に手持ちの理論を見直したり、あるいは放棄したりする必要もしばしば生じます。でも放棄するのはさいごの最後で、なぜそのモデルがうまくいかないかをズバリ理解して、それを手直しして世界を記述できないか考えようとあれこれ努力もしました。本書はそのやりとりから生まれたものです。それは貧乏な人たちがどんな暮らしを送っているかについて、一貫性のあるお話をまとめようとする試みの成果なのです。

わたしたちが注目するのは世界の最貧者たちです。貧乏な人々がいちばん多い世界の50カ国で、平均の貧困線は1人1日16インドルピーになります。それ以下で暮らす人々は、自国政府の基準で貧困と見

なされているのです。いまの為替レートだと、16ルピーというのは30円くらい。でもほとんどの発展途上国では物価が安いから、貧乏な人たちが自国と同じものを日本で買ったとしたら、もう少しお金がかります——換算するとそれが120円（99セント）くらいになります。だから貧乏な人の暮らしを想像するには、日本で暮らして日々の生活に必要なものすべて（家賃以外）を1日120円で賄えるかどうか想像してみればいいでしょう。なかなかつらいでしょう——例えばインドでは、これに相当する金額で小さなバナナ15本くらいか、低質の米を1・5キロほどが買えます。それで暮らしていけますか？でも2005年の世界では、8・65億人（世界人口の13パーセント）がまさにそれをやっていました。

驚くのは、これほど貧乏な人たちでも、ほとんどあらゆる点でわたしたちみんなと何も変わらないということです。同じ欲望と弱みを持っているのです。貧乏人は、他のみんなと比べて合理性に劣るわけでもありません——その正反対。まさに持ち物があまりに少ないからこそ、彼らは選択をきわめて慎重に考えることが多いのです。生きるだけでも、高度なエコノミストにならなくてはやっていけないのです。それなのに、わたしたちと貧乏な人々の生活は酒と肴くらいかけ離れています。そしてこれは、わたしたちの生活のなかで、みんなが当然だとして考えもしない各種の側面のおかけが大きいのです。

1日120円（99セント）で暮らすということは、情報へのアクセスが限られるということです——新聞、テレビ、本はどれもお金がかかります——だから世界の他の人々が当然だと思っているいくつかの事実をまったく知らないことがあるのです。例えばワクチンで子供がはしにかからずすむ、といった事実がわからなかつたりします。各種の制度が自分たちのような人々を念頭においていない世界に暮らすことにもなります。ほとんどの貧乏人には月給なんかないし、ましてそこから年金が自動天引きさ

れることもありません。いろいろ細かい但し書きのついてくるものについて判断しなくてはならないのに、細かくない記述のほうすらあまりきちんと読めない、ということでもあります。字の読めない人は、発音もできない病気をあれこれカバーしてくれない健康保険商品について、どう考えればいいでしょう？ 政治体制についての唯一の体験は、いろいろ約束されても何一つ実現しないということなのに、それでも選挙に行くということにもなります。そしてお金を安全にしまっておくこともできません。銀行があなたのわずかな貯金から得られる儲けは、それを扱うためのコストに足りないから……。こんなことばかりなのです。

これが総じて何を意味するかといえば、自分の技能を最大限に活かし、家族の未来を確保するにあたり、貧乏な人はずっと多くの技能や意志力やがんばりが必要だ、ということなのです。そしてその裏面として、わたしたちがほとんど考えずにすむ、ちよつとした費用やつまらない障害、わずかなまちがいが、貧乏な人の人生では実に大きいのです。

貧困から抜け出すのは難しいけれど、可能性を感じさせて、ツボを押さえた手助け（ちよつとした情報やあと押し）をすると、時には驚くほどの成果が出ます。一方で、期待をはきちがえ、必要な信念が欠け、ごくわずかに見える障害があるだけで、ひどい結果になってしまいます。正しいレバーを押しただけで巨大なちがいが生じるけれど、そのレバーがどれかを見極めるのはむずかしい。何よりも、一本ですべての問題を解決するようなレバーがないのははつきりしています。

本書『貧乏人の経済学』は、貧乏な人の経済生活を理解することで生まれる、とても豊かな経済学についての本です。それは貧乏な人が何を実現できて、そのためにどこでなぜあと押しすべきかを理解す

るための理論についての本です。本書のそれぞれの章は、各種の障害がどこにあるかを見つける探求を描き、それを克服する方法を探しています。まずは人々の家族生活の重要側面から始めましょう。何をかうか、子供の学校をどうするか、自分や親子の医療はどうするか？ それから、市場や制度が貧乏な人々をどう支援できるか説明します。直面するリスクに備えて、借りたり貯金したり保険に入ったりできるでしょうか？ 政府は彼らのために何をしてくれて、どんなときに失望させるでしょうか？ 本書を通じて、同じ基本的な問いが繰り返されます。貧乏な人は生活改善できるのか、そしていまそれを妨げているのは何？ それは取りかかる費用が高いのか、それとも続けるのに苦労するのか？ なぜそれが高くつくのか？ 人々は便益がどんなものかわかるか？ わからないなら、何が学習の妨げになるのか？

『貧乏人の経済学』は結局のところ、貧乏な人の暮らしや選択が、世界の貧困と戦う方法について教えてくれることについての本です。例えばマイクロファイナンスは便利だけれど、なぜ一部の人が期待したような奇跡ではないか理解できるようにします。あるいはなぜ貧乏人が、便益より害のほうが大きいような健康保険にしか入れないのか。なぜ貧乏人の子供たちは、何年も学校に通うのに何一つ学べないのか。なぜ貧乏人が健康保険をほしがらないか。そして本書は、なぜかつて万能の解決策と言われた施策が、今日の失敗したアイデアの山に投げ捨てられるかを明らかにします。本書はまた、希望がどこにあるかもいろいろ述べています。なぜ形ばかりの補助金が、形ばかりなどでない効果をもたらせるのか。保険をもっとうまく売る方法、なぜ教育では少ないほうが成果が高いこともあるのか。なぜ成長のため

にはよい職が重要か。そして何よりも、なぜ希望が必須で知識が不可欠かも明らかにし、なぜ課題があまりに大きく見えても、努力を続ける必要があるのかも明らかにするのが本書です。成功は必ずしも、見た目ほど遠いわけではないのですから。